

## 「極東へ／曠野の地平に向けて」

### ◎ ランスの二つの小衛星

古都ランスを地球に例えれば、月のように牽引し合いながらも距離をおいて独自の存在感を持つ幾つかの村がある。アルフレッド・ジェラルルが眠るブザンヌもその衛星のひとつである。ランス駅前よりバスで南西に約10分、農業を主体とする外周僅か3kmほどの小さな村である。ジェラルルの父ジャン・ジェラルルはこの村に生まれた。村は同族であるジェラルル姓とクーロン姓で占められ、アルフレッドの祖母も17世紀まで辿れる名家クーロン一族であった。

そしてもうひとつの衛星、市央から北東に約10km離れたラヴァンヌは、アルフレッドの母マリー・テレーズ・シェリュイの生地である。ラヴァンヌは面積こそブザンヌに劣る小さな村ではあるが、1850年代、ブザンヌの住人約300名に対しラヴァンヌは最多968名と産業に支えられ発展した。こちらも同族婚の結果、1808年からの10年間に58ものシェリュイ姓の出生届があったという。

因みに、ラヴァンヌに向かう途中に比較的大きな村、ヴィトリー・レ・ランスがある。ここは帰国後のアルフレッドが奇宿していた旧友コンスタンティン・レクレールの屋敷のあった村である。



ランス市を中心にブザンヌ、ラヴァンヌ、ヴィトリー・レ・ランスの各村

### ◎ 父母の親族の影響

アルフレッドの母マリー・テレーズは、市内繁華街のサン・デニ市場街15番地（現在のシャンジー通り15番）にあったジャンのパン屋を手伝っていたが、病弱なため、一人息子のアルフレッドは13歳頃まで、ブザンヌの祖父母、ニコラス・ジェラルルとマルグリット・クーロンの里子同然のような生活だった。父方のおじ・おば・いとこの親族に囲まれて幼少の多くの時間を過ごしたブザンヌはアルフレッドにとって「帰るべき場所」ではあったが、他方でその故に直接の両

親とは疎遠な寂しい少年時代を送ったことになる。

一方、産業の発展を見たラヴァンヌでは、母方のシェリュイ一族とこれから派生したマンガート、レクレール、ガモートルの一族が、マリー・テレーズの祖父の興した大農場の資産を基礎に様々な稼業を営んでいた。その親族と稼業を列挙すると、ニコラス・レクレール(豚肉屋)、オルテンス・レクレール(食料雑貨・仕出屋)、マーチン・レクレール(パン屋)、マリアンジェリーカ・ガモートル(パン屋)、アウグステウス・シェリュイ(食料雑貨・宿屋)、オネージン・ガモートル(パン屋)、となる。ジェラルルが横濱に入植早々に、肉屋・食料雑貨を起業したのも、こうした母方の親族の影響といって過言ではない。特にジェラルルの母方の伯父にあたるガブリエル・ナポレオン・レフェルベ・シェリュイはワイン商を営み、後に見るようにアルフレッドの人間形成に多大な影響を与えることとなる。

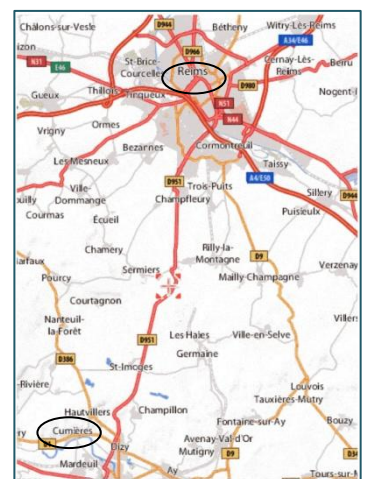
### ◎ 国際都市・ランス

アルフレッドは14歳頃から、父親のパン屋より市内マルモーゼ通り5番にある衣類・羊毛製品製造のフェリックス・ゴッドベルト商会に職工として通い始める。当時、羊毛加工とシャンパンはランスの二大主要産業だった。羊毛はオーストラリアからイギリスに輸入され、これがランスで製品加工されていた。こうした工場の経営者はドイツ出身者が多く、若き職工、少年アルフレッドはゴッドベルト商会で国際感覚を余すことなく吸収していったと想像される。羊毛とシャンパン取引で国際化していた都市ランスにあって、コスモポリタンとしてのジェラルルが育まれた理である。

やがて、アルフレッドが20歳の時、父ジャンは病弱な妻マリー・テレーズの健康を案じ、市内のパン屋を突然畳んで第三者に店を貸し、自分は妻とともに実家のあるブザンヌにひきこもって小麦粉小売業に転ずる。アルフレッドは父の命によりランス市内に留まり、ゴッドベルト商会への通勤を続けることになった。

### ◎ ワイン商人としての修行時代

ランスに置去りにされたアルフレッドは、母方の伯父であるフェレルベに心の拠り所を求めようになった。フェレルベは、ランスより南南西に約25kmのマルヌ河畔にあるクミエールでワイン商人をしていた。アルフレッドは21歳でゴ



ランス市とクミエール村

ッドベルト商会を退職し、伯父のもとでワイン商人としての修行を始める。フェレルベは近隣各国、特にベルギーに赤ワインを卸す事業を興していたが、イギリスのソールズベリで、家族連れで夏休みを過ごすような習慣をもつ国際商人としての肌感覚を持っていた。

この伯父の後見のもと、アルフレッドはイギリスに2年、ドイツのドレスデンに1年滞在し交易を学ぶことになる。またフェレルベの保証により貿易商としてハンブルクに滞在し貿易実務にも従事している。

こうして少年時代にゴッドベルト商会で培われたアルフレッドの国際感覚は、国際貿易の実務を通じて更に磨きがかかる。来日直後の起業に向けたジェラルールの瞠目すべき精力的な活動も、その実務能力の高さに負うもの見て間違いない。

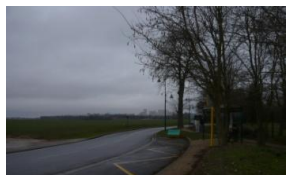
### ◎ 母の死、父の再婚、そして出帆

アルフレッドが、貿易商としてのキャリアを積みつつあった22歳の1859年、ジャンの看病の甲斐もなく、母マリー・テレーズは45歳の若さでこの世を去ってしまう。更に、その3年後、父ジャン・ジェラルールはジャンヌ・ビクトリーヌ・ボーディアという未亡人と再婚する。この再婚は、母方のシェリュイー族にも好意的に迎えられ、マリー・テレーズの父親がジャンの再婚の結婚証人となったほどであった。

アルフレッドをランスに引留めておくものはもう何ひとつ残っていない。彼の心はランスの曠野の地平に広がるユーラシア大陸の彼方へと向かっていたのだ。



Bazanの教会



Bazanよりランスを望む

### ◎ 極東への航海

そして、アルフレッド・ジェラルールは遂に東に向けて航海に出る。その航路は不詳であるが、参考までに、ジェラルールの航海の2年後の慶応元年(1865)、開国後の人材育成を期し鎖国の禁を犯して薩摩藩の15名の若き志士たちが英国を目指した航路を辿ってみよう。彼らは最終的に英国サザンプトンに到着するが、その寄港地を逆に遡ると以下ようになる。サザンプトン(6月21日)→スペイン・ジブラルタル(6月16日)→地中海ギリシャ沖・マルタ島(6月12日)→エジプト・アレキサンドリア(6月9日)→鉄道で陸路スエズ(6月8日)→イエメン・アデン(5月31日)→インド・ボンベイ(5月22日)→セイロン島・ゴウル(5月15日)→マレーシア・ジョージタウン(5月8日)→シンガポール(5月5日)→香港(4月29日)→長崎(4月16日)。これで海路ほぼ2ヶ月の旅程となる。

そしておそらく、ジェラルールは香港から上海に立ち

寄った筈である。それは横濱での起業にとって重要な意味を持つ寄り道であった。詳しくは次稿に譲りたい。

### ◎ 何故、日本を目指したのか

ジェラルールが何故、日本を目指したかは詳らかではない。しかしジェラルールが貿易実務を学んでいた丁度その頃、日本研究に関する重要な著書が出版されていることに着目する必要があるだろう。それは1856~58年に刊行された『ペリー艦隊 日本遠征記』である。これは嘉永6年(1853)7月、浦賀に来航し、翌安政元年(1854)3月に横濱で日米和親条約の締結にこぎつけたアメリカ海軍ペリー提督が、随行員の手記を含む膨大な記録をもとにホークスに公式記録として作成させたもので、地政学や動植物学から文化人類学的考察に至る幅広い日本紹介の好著である。アメリカ上下院への議会文書として作成され3万4千部が印刷された後、市販用に簡約版も出版されている。

アメリカは第二次大戦中の敵国研究の副産物として文化人類学の金字塔であるR.ベネディクト『菊と刀』を生んだ。『日本遠征記』も、鎖国中の日本への欧米列強の進出競争の中で、アメリカが先行して和親条約の締結交渉を有利に運ぶための実利的関心に端を発しているものの、それはひとつの壮大な日本文化論になっている。一方で、アメリカ人にありがちな「未開発国としての日本」という視点からは逃れ得てはいない。

これは筆者の想像に過ぎないが、ジェラルールは貿易実務を習得する傍らこの著作に接し、文化人類学的な強い関心を日本に抱いたのではなかろうか。それは前稿に述べた相対主義に依拠する関心であって、ペリーに代表されるアメリカ人の優越史観的な関心とはまた異なるものであったと想定できる。

そこに描かれた日本は、母親の早すぎる死と父の再婚によって「故郷喪失者」となったコスモポリタン＝アルフレッド・ジェラルールを誘引するに十分な魅力に満ちた東洋の神秘の国であったに相違ない。

[脚註: ジェラルールが『日本遠征記』を読んだという確証はないが、ひとつだけ興味深い事実を指摘しておこう。『日本遠征記』の序章に日本人の漁師が厄除けと称して、猿の上半身と魚の下半身を巧みに繋ぎ合せた「人魚のミイラ」を外国人に売り付ける逸話が出てくる。ジェラルール・コレクションにもこの「人魚のミイラ」が含まれていることが知られている。]

[参考資料]

『薩摩スチューデント、西へ』  
(林望/光文社)

『ペリー艦隊 日本遠征記』(オフィス宮崎編訳/万来舎)  
"Alfréd Gerard-le champenios de Yokohama" (Huguette Guyard/Presse Mumérique)



ジェラルール・コレクション  
「人魚のミイラ」